

在宅・地域でここまでできる!

2015年
7月号

Vol.20 No.7 2015, July

医学書院

訪問看護と介護



特集

在宅チームケアならできる!

サルコペニアフレイルの 予防と回復

多職種×リハ栄養

おかげさまで
創刊
20
周年

ナラティブホームの物語

終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ

佐藤伸彦＝著

本体1800円＋税

医学書院 ☎03-3817-5657

ナラティブホームの物語



終末期医療をささえる
地域包括ケアのしかけ

佐藤伸彦

「なぜ病院で治らなかったのに、自宅で良くなったのですか？」

「そういう人生も、あっていいんじゃないですか？」

高齢期・多死社会を迎えたこの国で、人が安らかに死ねる住まいをめざすチームが岡山県鶴岡市にある。家族のような関係づくりをめざした施設と、患者同士の「もののけ」に育ったケアは、医療と介護の境界を越え、地域から強い力を生み出す。ナラティブホームはなぜ誕生し、どのように運営され、何をめざすのか。明日の医療をささえる勇気の物語、また死ぬ権利をへ――

医学書院

介護の理想と現実をつなぐ
おせっかいな医療チーム

本書の著者・佐藤伸彦医師とナラティブホームのスタッフが、当社の運営するサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）「銀木屋」を視察に訪れてくれたときのことである。折しもお昼どき。彼らは、食堂でひとり寂しく座る入居者にいち早く目をつけ、対話を始めた。膝を落とし、目線を合わせ、肩に手を寄せ、やさしくゆつくりと話を聞き出すその姿を、まず遠巻きに見ていた。その出身がナラティブホームと同じ富山県だったこともあり、会話は弾む。やがて、入居者の頬に一粒の涙が。正直言って激しく嫉妬した。普段から生活に密着しているわれわれにも

なかなかできないことを、いとも簡単にやっつけてしまうそのチームの連係プレイの凄さに、嫉妬したのだ。それは、われわれがいかに「介護サービスを提供するだけの事業者」であるかを認めざるを得ない体験だった。日本の「最先端医療」とはかくあるべきと感動した。

後日談もある。その入居者の地元の魚をわざわざ「本人宛」に取り寄せ、ほかの入居者へ振る舞う機会まで整えてくれたのだ。著者の人に対する思いやりの強さ。本来、指導者がとるべき行動の模範だと思った。まさに本書で言うところの「やさしさのしかけ」なのだろう。なんともワクワクするしかけではないか。普段から理想と現実のギャップに打ちひしがれている介護士たちへさまたまな「しかけ」を行なっているわが身として、さらに勇気をいただく指導であった。

自宅ではない在宅への挑戦

私は最近、介護保険制度に依存したビジネスモデルの将来性に懐疑的である。それは、進みすぎた医療技術による日本の病院診療そのものかたちに酷似しているからだ。サ高住は賃貸住宅だ。しかし、その実態は、要介護1・2程度の軽度要介護高齢者を集め、介護漬けにする

ことで事業の継続性を担保しているビジネスモデルになりつつある。いわば、介護保険制度の隙間をついた「本当に必要なのだろうか事業」ともいえる。もちろんそんな事業者ばかりではないのである。うが、大半はその方向だ。われわれも気がつけばそうなるかもしれない可能性がきわめて高い。この現実をどう捉え、いかに事業を正しい方向へ導いていくのか。その道しるべが、本書に記されていると思う。「自宅ではない在宅」を、施設や病院という枠を超えて、別の角度から実現しようという挑戦でもある（p.160）。まさにナラティブホームの神髄はここにあると思う。私はサ高住だろうが本当の自宅であろうが、人が最期を迎える場所はどこでもいいのではないかと思っている。ケアの質は、環境に依存しているからだ。そこで生活する本人の思い、関わる人の行動が肝要だ。本書に記載されているように、人は「役割」を喪失してしまつた時点から生きる力を失う。それはたくさんの入居者を見ている私も強く感じることだ。冒頭のエピソードは、まさに入居者へ役割をもたせるものであった。私はおせっかいな人が大好きだ。そして、間違いなく本書は、世界ナンバーワンのおせっかいなチームの物語である。